
住・まちづくりフォーラム かわら版

ニューズレター第17号 2005年1月20日発行



特集：第17回住教育フォーラム
子どもの創造的まち学習とコミュニティの再生

目次

開催記録	…	2
フォーラム記録		
趣旨説明 小澤紀美子	…	3
講演1： 梅津政之輔	…	4
大場 寿子	…	8
講演2： 小玉 重夫	…	12
全体討論	…	18
延藤委員長まとめ	…	28
見学会記録	…	31

第17回住教育フォーラム開催記録

テーマ：「子どもの創造的まち学習とコミュニティの再生」

日時：2004年10月16日(土)見学会 12:00～13:00, フォーラム 14:00～17:30

会場：三茶しゃれなあどホール「オリオン」(世田谷区太子堂)

講師：梅津政之輔(世田谷区太子堂2,3丁目地区まちづくり協議会)

大場 寿子(世田谷区立三宿小学校教諭)

小玉 重夫(お茶の水女子大学大学院助教授)

参加者：建築・教育・まちづくりなどの研究者・実務者, 学生, 市民活動グループメンバーなど60名

企画：(財)住宅総合研究財団 住教育委員会

委員長 延藤 安弘(NPO まちの縁側育くみ隊代表理事)

委員 小澤紀美子(東京学芸大学教育学部教授)

木下 勇(千葉大学園芸学部助教授)

町田万里子(元筑波大学附属小学校教諭)

細田 洋子(建築と子どもたちネットワーク仙台)

奈須 正裕(立教大学文学部教授)

*所属役職は開催当時

子どもの創造的まち学習と コミュニティの再生

<趣旨説明>



(財)住宅総合研究財団住教育委員会委員
小澤紀美子
東京学芸大学教育学部教授

シティズンシップを育む教育

住教育フォーラムでは、実践的な話題を取り上げながら意見交換を行い、理論的なベースも積み上げてきました。その一環として『まちはこどものワンダーランド』（1998年、風土社）という本も出版しております。そういう文脈の中に、まちをもっと創造的に学び、つくっていくという趣旨が一貫してあります。

1957年に東井義雄さんが、「村を育てる学力」と言っていましたが、戦後日本はある意味で地域を捨て、文化も捨ててきたのではないかと思います。昨今の教育界、あるいは地域の問題を考えていくと、地域を捨てるような教育をやっているのではないかと思います。

しかし、「総合的な学習の時間」が始まり、地域あるいはまちを素材として、いろいろな学びが展開されていると思います。2003年度7月、「環境の保全のための意欲の増進および環境教育の推進に関する法律」が議員立法で通りました。この10月1日からその基本方針が明らかになり、完全施行になりました。私はその座長をやって基本方針をまとめました。

そこで特色的なのは、環境教育、あるいは環境保全のための意欲の増進は学校

だけにお任せではないということです。文部科学省、環境省、国土交通省、経済産業省、農林水産省の5つの省庁が協働し、いままでと違い、もっと横断的なテーマの中から、子どもたちの豊かな生活世界をつくり上げていくことがベースにあります。

ところが、「総合的な学習の時間」が始まってみますと、ただ体験させればよいということで、実際に子どもが何を学んだかわからない調べ学習も行われているように思います。例えばフランスのことについて勉強をすると、フランスの人口は何人で、国土が何というのを並べてレポートを書くだけなのです。欧米の子どもたちのレポートを見ると、自分の身近な課題やモノから考え、フランスで作られたものは何だろうという例を挙げて、それを日本と比較するといった取り組み方もあるわけです。

欧米の環境学習、あるいはまち学習を見ていると、クリティカルシンキング(批判的な分析力)考える力を重視しています。その行き着く所はシティズンシップであると思っています。私は、イギリスの環境教育を1970年代から調べておりますが、イギリスの場合シティズンシップはクロスカリキュラテーマとなっていました。それが、1998年からは統合されて、シティズンシップとなり、これはキーステージ(11歳)から必須科目になってきました。そういう流れが、どういう中で成立しているのかを本日のお話を伺いながら考えたいと思います。

コミュニティの再生が教育改革のカギ
本日のテーマである「子どもの創造的まち学習とコミュニティの再生」は、文部科学省からいろいろ教育改革のことが

出てきますが、いちばん大事なことは、ただ単に学校の中だけ改革しても駄目で、コミュニティが再生されなければ、おそらくこの教育改革は成功しないのではないかと思います。

講師は、太子堂のまちづくり協議会で長年やっておられます梅津さん、三宿小学校の取り組みを大場先生にお願いします。その後、お茶の水女子大学助教授の小玉重夫先生に「シティズンシップとまちづくり」というテーマでお話をさせていただきます。

小玉重夫先生は、『シティズンシップの教育思想』(2003年、白澤社)という本をまとめられておられます。その前に『学びへの学習』を翻訳され、新しい教育哲学の試みを書いておられます。教育界として押さえておかなければいけないということで、私も自分なりに学んでおり、あるところでお話を伺う機会もありました。住教育フォーラムをこのテーマでやる、どなたに講師をお願いしたらいいだろうという議論の中で、延藤先生から小玉先生のお名前が挙がり、私ももう一度勉強させていただきたいということで本日を迎えることができました。

少し難しい内容もあるかもしれませんが、アメリカとイギリスの教育界、経済界の動き等の中で、いまどういう方向にあるのか。その中で日本はどうあったらいいのか。太子堂・三宿で行われていることが、まさに日本の教育改革、地域再生に求められていることではないかと思っておりますので、皆さんと一緒に勉強していきたいと思っております。

それではまず、講演1「学校と地域の相互呼吸 - 太子堂・三宿地域のサバイバルキャンプを通して」、梅津さん、大場先生にお話を伺います。

学校と地域の相互呼吸

- 太子堂・三宿のサバイバルキャンプを通して -



梅津政之輔

世田谷区太子堂 2,3 丁目地区
まちづくり協議会

地域の側から
梅津政之輔

太子堂における防災まちづくり

私は太子堂で 24 年間にわたり、住民参加による修復型の防災まちづくり活動を続けてきています。そうした活動を通して、学校とのかかわりができてきた経過などについてスライドを使ってお話しします。

スライド 1 世田谷区の概略地図です。太子堂は東の外れにあります。区の中では最も早く市街化が始まった地域です。1923 年の関東大震災のときに、都心で家を焼け出された人、あるいは横浜で被災した人たちが大勢流入してきたために、小さな家が建て詰まる現象が見られるようになりました。

スライド 2 関東大震災後に建てられた 4 軒長屋です。その面影を残した建物が今でも残っています。田の畦道がそのまま道路になり、戦後さらに庭を潰して木造のアパートを建てる家が増えたこともあり、大地震が発生すると、世田谷区の中で最も危険な地域だということ、1980 年、区が防災まちづくりを呼びかけてきたことがきっかけで、ここでのまちづくりが始まりました。

世田谷区は防災の課題として、「建物の不燃化」、「狭い道路の拡幅整備」、「防災拠点としての広場づくり」の 3 つを掲げましたが、住民と話し合った結果、修復型ですすめる方針を確認しました。修復型とは、再開発事業や土地区画整理事業のように、建物を取り壊して新しく造り直すまちづくりではなく、改善できる所から改善していくやり方です。

区が建物の不燃化や道路の拡復整備といったハードの課題を掲げたのに対して、まちづくり協議会では、コミュニティづくりを通して、防災性能を高めていくソフト面に力を入れて活動していく方針を決めました。

スライド 3 最初に行ったのは、まちの問題点をみんなで共有していくことです。これは、車いすを使ってバリアのチェックをしているところです。これ以外には、緑の点検、ブロック塀の点検などいろいろテーマを決めて、協議会のメンバーがまち歩きをしました。

こういうまち歩きなどの活動は、本日のフォーラムの企画者である木下先生が当時大学院生だったのですが、太子堂の協議会に参加してくれて行いました。木下先生からは「ワークショップをやらせてくれ」という話があり、ワークショップについて一生懸命説明してくれたのですが、聞けば聞くほどよくわからなくなりました。少し胡散臭い感じもしたので、「協議会は立ち上がったばかりだから、そのうちに考えましょう」と言って受け入れませんでした。後で聞いたのですが、「梅津には片仮名の言葉を使っても駄目だから、まち歩きとか、まち点検ということで提案しよう」ということで実現したわけです。

木下先生などの提案で、まちづくりというのは子どもの視点からもチェックする必要があるということで、子どもにも車椅子でチェックしてもらいました。

スライド 4 まちの人たちに、まちづくりに関心を持ってもらうために「きつね祭り」というイベントを開催しました。太子堂には、キツネにまつわる非常に良い民話があるので、それを地域の人にも知ってもらおうという意味で「きつ



大場寿子

世田谷区立三宿小学校教諭

プロフィール

世田谷区三宿・太子堂地区は、1980 年から住民参加の防災街づくりを推進しており、「ハード」面だけでなく、コミュニティづくりを通して「ソフト」面からも防災性能の向上を目指してきた。

そのような下地のある中で、文部省が平成 9 年「いじめ対策地域連携モデル地区」として三宿・太子堂地区を指定したのを機に、三宿小学校では平成 10 年度からサバイバルキャンプを実施して地域との交流を図ってきた。

大場氏は、学校の学校協議会担当として、また梅津氏はまちづくり協議会から参加した学校協議会の一員として、それぞれサバイバルキャンプの企画・運営に携わっている。

ね祭り」と名付けました。これは、会場で消火器を使って空き缶を倒すと、鉛筆を1本あげますというものです。

スライド5 いろいろなイベントをやりました。子どもを対象としたオリエンテーリングもやりました。まちづくりに関係する地点を回ってもらい、所々のポイントにクイズを貼り出して、子どもたちに回答してもらいました。

これは新しくできたポケットパークのポイントで、地下貯水槽には何トンの水が入っているかを質問しています。何年もやっているけど、子どもだけではなく、お母さんも子どもの後ろからくっついて歩くということで、全体としてまちづくり活動のことが知られてきております。

スライド6 ポイントでクイズが解けないと、近所のおじさんやお兄さんも出てきて、子どもたちと一緒にクイズを考えてもらう、というほほえましい光景も見られるようになりました。

中学生の提案も活かしてつくったポケットパーク

こういう楽しい活動をやっている、まちが良くなると非常にうれしいのですが、なかなかそうはいきません。この24年間に18カ所のポケットパークができましたが、ポケットパークをつくる際には、近所の人にも呼びかけて、どういう公園にするかを話し合っ提案づくりをしてきました。

スライド7 ここは、世田谷区が買収した土地ですが、ポケットパークにしようということになりました。この道路の右側に太子堂中学があるので、生徒会に呼びかけて生徒にも参加してもらいま

した。

近所の人を含めた第1回の話合いに私は出られなかったのですが、後で話を聞くと2軒のお宅から「ここに公園をつくるのは反対だ」という、かなり激しい意見があったそうです。理由は、太子堂中学の生徒は不良が多くて困っている、こんな所にポケットパークをつくと、不良のたまり場になるから反対だ、という主張だったそうです。太子堂中学の1年生から3年生までの生徒会代表が出ていたのですが、激しい批判に、1年生の女子が泣き出した、というような状況があったそうです。

とにかく反対意見をもう一度よく聞くのではないかとということで、2回目の話合いのときは私も出ていきました。そのとき、子どもたちのことを心配した、PTAのお母さんたちも出てきて、「住民の反対運動に子どもたちを巻き込まないでください」ということで、かなり厳しい批判を受けました。ただ、反対したお宅の事情をよく聞いてみると、行政に対する不満をちょっとすり換えて矛先を太子堂中学に向けたということがわかったので、それは別途解決しました。

そういういきさつがあったので、これでは中学生たちの参加は無理だなと思っていたところがそうではなかったのです。太子堂中学の生徒会の会長が「太子堂中学の生徒全部が不良のように見られているのは残念だ。全員で良い提案づくりをしようではないか」ということを積極的に提案してくれました。学校もそれを応援するために、「総合的な学習時間」を、公園づくりの時間に当ててくれました。

スライド8 その結果、約4カ月後に生徒会から提案が出てきました。それ



スライド3 まちの点検



スライド4 きつね祭り



スライド5 オリエンテーリング



スライド6 クイズを一緒に考える



スライド7 区の買収地をポケットパークに



スライド8 中学生の提案も活かしてポケットパーク完成



スライド1 世田谷区概略図

スライド2 四軒長屋



を原案にして、現在このような花壇のあるポケットパークになっております。生徒会の1人が神戸の地震の話を書いて、避難所でいちばん困ったのがトイレだということから、下水直結型のトイレをつくろうと提案してくれました。折角中学生が提案してくれたので、協議会としては世田谷区に働きかけ、下水直結型のマンホールトイレを2ヶ所つくってもらうことができました。

完成したときに、近所の人と、中学生に参加してもらいました。生徒会の会長だった生徒は卒業していたのですが、来て挨拶してくれました。そのときに彼を見たら茶髪なのです。私の年代だと、茶髪には非常に偏見がありました。ところが、挨拶を聞いてびっくりしました。「太子堂中学の生徒の信用を回復するため、後輩のみんなが、この管理をきちっとやってほしい。それによって、地域の人たちの信頼を得るような努力が必要だ」という挨拶をしてくれたので、私は感激しました。現に、生徒会と近所の人交替で、この水やりや掃除をいまでもやってくれています。

高齢者の知恵と技術をまちづくりに

スライド9 太子堂の協議会活動も10年経って、防災という視点だけでまちづくりを考えていくと、逆にいろいろ問題があることに気がつきました。例えば、木造のアパートをマンションに建替えるということは、防災上は大変良いことなのですが、木造のアパートには独り暮らしの高齢者がかなり住んでいて、行き場を失う事例を2、3耳にしました。

そこで、最初に、「老後も住み続けられるまちづくり」という、高齢化対策を前提としたまちづくりの検討のためのワークショップを行いました。20代の若い人

から80代まで70人の人が参加してくれて、6つの提案をまとめました。

その1つに、「楽働クラブをつくろう」という提案がありました。提案趣旨の説明してくれた若い女性が、「高齢化社会」といって、寝たきり老人とか痴呆老人という暗いイメージを持っていたけれども、太子堂・三宿の高齢者に会っていろいろ話を聞くと、みんな元気で、いろいろな知識や技術を持っている。それを、まちづくりに活かしてもらいたい」という趣旨で楽働クラブをつくろうという提案をしたと話してくれました。

このワークショップの後、「楽働クラブ」は8人でスタートしましたが、現在は30名ほどになっています。中心メンバーが植栽に大変詳しい人たちだったので、太子堂・三宿の、世田谷区が買収したまちづくり事業用地をこのように花壇にして、美しいまち、楽しいまちにしていく活動を始めています。

スライド10 活動がずっと広がりを持っていった過程で、かつて三宿小学校の先生をしていた人の紹介もあり、1年生に花植えを教えてやってくれという話から、烏山川緑道に、春は花植え、秋は球根植えということで、年に2回1年生に教える活動をしています。

スライド11 球根植えをした後、水やりをしているおばさんがいますが、これは私のカミさんです。子どもの後ろの女性は学校の先生です。いちばん左側が三宿の町会長の佐々木さんです。町会長の奥さんの話だと、ものすごく忙しい人なのだが、この日はすべての用事を断って、朝からソワソワして出かけていくそうです。「うちのお父ちゃんは、自分の子どもが学校でお世話になっていたときには、学校に1回も顔を出したことがないのに」と苦情を言っていました。

スライド12 東京の子は、土いじりをしたことのない子どもが多いです。ですから、土を掘ってミミズが出てくると大騒ぎをします。先年亡くなりましたまちづくり協議会の寺崎さんが、ミミズは土の中でどういう役割をしているかを子どもたちに教えている風景です。

スライド13 まちづくり事業用地は使われないまま置いてある所がかなりあります。そのうちの1カ所は現在、三宿小学校の農園になっています。5年生が担当してプチトマト、小松菜、芋などを植えています。サバイバルキャンプの食材に使われたりしています。

サバイバルキャンプで地域と子どもたちが交流

本日の報告の主題でもあるサバイバルキャンプを始めるきっかけになったのは、1997年に文部省が、いじめ対策地域交流モデル地区を全国に28カ所指定しました。そのうちの1カ所として太子堂小学校、太子堂中学、三宿小学校の3校を指定してきました。

この指定をきっかけに世田谷区では、「豊かな心を育む地域連携世田谷プラン」をつくりました。初年度は、神戸の地震の後だということもあり、またこの地域が防災まちづくりをやっていることもあって、神戸の鷹取中学の校長先生をお呼びし、被災経験を子どもたちに話してもらいました。

1998年からは、学校ごとに、自主的に計画づくりを考えていくことになり、区から私のほうにその手伝いをしてくれという話が来ました。最初は、まちづくりセンターと一緒に企画を考え、まずプレサバイバルキャンプのイベントをやりました。

打合わせをした際に、サバイバルキャ



スライド9 ワークショップ



スライド10 楽働クラブで花植を教える



スライド11 水やりも一緒に

ンプを単に1回だけのイベントに終わらせないため、楽しい企画を考えるが、できるだけ実践的な課題にも取り組むこと、また、子どもの学習にも役立つ企画を考えるということを確認しました。

スライド 14 これは太子堂小学校です。まちのあちこちにある防災倉庫や地下貯水槽を見て歩いて、それを子どもたちがまとめて発表する、ということを実前にやりました。

スライド 15 三宿小学校の場合は、毎年中身を少しずつ変えております。1日目に、ワークショップと称して、学年別にいろいろなテーマで、地域の人が子どもたちにいろいろ教えます。おばあさんが手品を子どもたちに教えたり、パン屋さんがパンプリンの作り方を教えたり、大変人気があったのは、看護師さんが火傷の応急手当を子どもたちに教えるという本題の前に画用紙を使ってナースキャップを作らせた。女の子たちは、サバイバルキャンプ中それを頭から離さないというように、大変喜んでいました。そのように楽しいことを、地域の人と学校が一緒になって企画を進めてきています。

スライド 16 三宿小の場合には、ほとんど全校生徒がサバイバルキャンプに参加していますが、泊まるのは4年生以上です。1年生から3年生までは、夕方親に引き取りに来てもらうのも訓練だということで帰ってもらいます。

いまは地域班に分かれて、地域の人と中学生も含めて各教室に泊まります。6年生だけは校庭のテントに泊まります。これが楽しいらしくて、5年生は「来年はテントに泊まれる」と言って楽しみにしているそうです。

スライド 17 4年生が夕食の材料



スライド 12 土掘りでミミズに遭遇

作りをしているところです。5年生は、かまどの鍋係です。かまどの設置までは大人がやりますが、火をつけて、燃やして煮炊きをするのは子どもたちです。子どもたちにも一定の役割を持ってもらうことを狙っている企画を進めてきております。

スライド 18 校庭で地域の人と一緒に夕・朝食をとるということをやっています。夕食が終わると、校庭でキャンプファイヤーをやって、歌ったり踊ったりという楽しい時間を過ごします。翌朝は、町会の人たちも大勢参加して消火訓練等をやります。

スライド 19 このサバイバルキャンプは、消防署も全面的に協力してくれていて、はしご車を校庭に持ち込んで、6年生だけが乗れます。5年生は「来年は乗れる」と楽しみにしていたのが、よそで事故があったため、昨年から駄目になってしまいました。

サバイバルキャンプは、企画づくりだけでなく、実施するための機械、食材の手配や協力者の動員など事前の準備に多くの時間、労力がとられます。

これらは主として学校とPTA、おやじの会の若い人たちが主力になってすすめてくれており、これらの人たちが次第にコミュニティづくりのリーダーとして役割を果たしつつあります。

このように三宿、太子堂地区では、サバイバルキャンプを通して、楽しく、地域の人たちと子どもたちの交流の輪が広がってきています。

いろいろ報告したいことはありますが、質疑のときにも追加報告をさせていただきます。



スライド 13 まちづくり事業用地を小学校の農園に



スライド 14 防災拠点を見て発表



スライド 15 ナースキャップづくり



スライド 16 6年生はテント泊まり



スライド 17 子どもたちが夕食の煮炊



スライド 18 地域の人と一緒に食事



スライド 19 消防署も全面協力



「ふるさと三宿 100人プラン」

今年は4年生を担任しております。三宿小学校に勤めて6年目になります。以前は町田市に勤めていて、三宿小学校に異動してきたとき、住民が元気で、親が学校に大勢やってくる学校だったので、少々びっくりしたのが教師としての本音です。子どもと付き合うのは慣れていましたが、地域の方や親と付き合うのは大変苦労がいりまして、正直そんな気持ちからスタートしたのを覚えております。

学校協議会の担当に、学校代表で私になりました。学校協議会を月に1回ぐらいずつ行い、サバイバルキャンプを企画していくのですが、これが大変なのです。

学校の先生、地域の方々、町会の方々、ボランティア団体、中学校の先生が狭い部屋に並びます。さまざまな立場の方が、さまざまなことをおっしゃるので、なかなか協議が進みません。

学校協議会に出て、私がちょっと疲れた顔をしていると、地域の方が「大場先生はお仕事ですよ」と言われたのをとてもよく覚えています。私は、仕事としてやらなければいけないのですが、地域の方はボランティアでやっているのです。その心づもりをよくわかってから出かけていくように、と校長先生に指導されたことを覚えています。しかし、学校協議会を通して、たくさん実践をつくらせていただいたことを紹介いたします。

図1 これは私が4年ぐらい前に総合の研究を請負ったときに作った「100人プラン」です。ネーミングのいわれは、入学したときから卒業するまでに、子どもたちを100人の地域の方や友達に出会

わせたいということです。

そのときに、100人に出会う根拠として考えたのは、例えば「梅津さんこんにちわ、私が大場です」「私が梅津です」と言った後に、梅津さんに何か質問する。

「梅津さん、好きな食べ物は何ですか」「私はハンバーグです」「私はお寿司が好きですよ」と言ったら100人のうちの1人と出会ったことにしました。要するに、挨拶をして、名前を言って、1つ会話をしたら、100人プランという手帳を作り、そこにサインをし合おうという具体的なものを考えておりました。入学してきた子どもの手帳の中に、名前が綴られていたらいいなと考えて作りました。

3年生はまち探検をメインに、4年生は水とゴミを中心に生活、5年生は職業体験でまちを知り、6年生はまち全体をハードとソフトでまちづくりを考えて提案していこうと、私の中では整理されていきました。いまは英語が入ってきたり、

	1学期 (40時間)			2学期 (40時間)				3学期 (30時間)			
	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年 105	なかよしっばい大作戦 友達100人できたかな (12)		とびだせ 春夏秋冬 あさがお(14)		生き物と友達(9)	とびだせ秋 学校楽しいよ	お手伝い大作戦(9) 花いっぱいになれ(18)		とびだせ冬 伝承遊び(14)		なかよしっばい大作戦(8) もうすぐ2年生(2)
2年 105	なかよしっばい大作戦(10) 生き物と友達(5) 野菜を育てよう(5)		探検 発見 大ぼうけん(20)		ぐんぐん育て さつまいも(5)	探検 発見 だいぼうけん 太子堂小との交流(15)	みんなあつまれ やっほいまい(10) 球根植え(5)		お年寄りとの交流 ふれあい給食(10)		広がれ私の物語(10) 探鳥会(2) 明日へジャンプ(2)
3年 110	学校でボランティアの中の生き物(10)	ふるさと三宿 子どもにHAPPYまち探検(15) 社会と関連 三宿ランドの草とり 水やり			みんななかよし 友だちと一緒に たぬきまつりにフリーマーケットにお店を出そう(30)		ふるさと三宿 社会と関連 おじいちゃんおばあちゃんの時代にタイムスリップ(15)				
4年 110	学校でボランティア うさぎの世界 アルミ缶リサイクル計画(10)	ふるさと三宿 ぼくたちゴミの探検隊(15) 社会と関連 三宿ランドの草とり 水やり		防災探検	みんななかよし 友達がいっぱい わかばの友達、目の不自由な方、いろいろな人と伝え合おう 耳の不自由な方、世界の友だち(50)						一年間の活動のまとめをしよう
5年 110	学校でボランティア 三宿ランド計画(15)	ふるさと三宿、川場と三宿を比べて 発見 主作り 種まき 水やり		水	外国の方 友達と	わかば学級	耳の不自由な方 目の不自由な方		比べ	ふるさと三宿、比べて発見 この人この娘この仕事(35)	
6年 110	学校ボランティア チャボの世話(10)	ふるさと三宿 比べて発見 日光と三宿を比べて(15) 三宿ランドの草とり水やり		火・食料	川場の環境調査員	デイホーム 保育園	街づくりセンター 民間クラブ 下の谷商店街		ふるさと三宿 住みよい家の環境調査(246と関連) 住みよい町を調査しよう(30)	21世紀僕達私達の自由研究をしよう(15)	
わかば 110	モルモットの世話(10)	比べて感じる 三宿と河口湖(15) 三宿ランドの草とり 水やり		地域	街づくり協議会	町会会長	稲荷神社	世田谷区緑の計画 街づくりプランナー	運動会 一緒にがんばろう(10)	みんななかよし 友だちがいっぱい(20)	来年もよろしく カレンダーづくり(15)

図1 三宿総合100人プラン

時間数が足りなくなってきた、全部はできていませんし、残っているものもたくさんあります。

スライド1 「100人プラン」の中身です。クラスのお父さんが金魚を持ってきて、プールの中に金魚を放して、それを子どもたちに釣らせたい、取らせたいということでした。これはプールから金魚を取るときに、水が引く所に金魚が入っていってしまい、金魚を殺しているのではないかと、いろいろなことが言われましたが、3年続けました。

そのときに、釣り竿をおやじの会の方が教えてくれて作りました。作ったことがないので、糸がグチャグチャになりましたが、子どもたちはお父さん先生にとってもなついて、よく名前を覚えしました。

スライド2 おやじの会の人たちに頼むだけではなくて、学校の職員の中にもきっと名人はいるだろうから、もっと活用しようではないかということで、校長先生はコマ名人でしたので、中心になってコマを作ったこともあります。

近くの大学の先生で、学校評議員もされている方も、いろいろな話をしに学校へ来てくれました。実は、この方もうちの保護者でした。いちばん頼みやすいのが保護者で、お父さん、お母さんが最初の窓口になります。お父さん、お母さんが「先生、実はこういう方を知っているんだけど、どう」と教えてくれて、「よろしくお願いします」ということでネットワークを広げていきます。やはり、保護者がいちばん力になってくれたような気がします。

学校でずっと続けられる工夫を

スライド3 三宿太鼓という郷土文化があり、道徳の時間にまず話をしてもらい、今度は太鼓を実技で練習してみようということになりました。音楽の器楽合奏クラブで実技指導をした後、放課後に三宿太鼓として練習し、運動会での演奏につながりました。授業から実技、実技から全校、全校に広めたら、今度はどこがずっと続けられる窓口になるのか、クラブや担当の先生などをはっきりさせ、

ずっと続けられるようなシステムまでつくることが大切です。いまでも、三宿太鼓は運動会でやっています。

スライド4 先ほど紹介がありましたが、地域のボランティア・クラブの方と1年生が花植えをします。ボランティア団体のサバイバルキャンプへの参加が増えました。その中に「火の用心の会」という団体があります。カチカチと鳴らしながら夜回るのですが、子どもたちは「火の用心の会」のネーミングも好きようです。地域で活動されている方が、学校協議会を通して、どんどん学校に、やらせてくださいとか、私たちのほうでこういう方を募集しています、ということで参画してきてくれました。

スライド5 地域の専門家もたくさん見つけました。この方は獣医さんです。獣医さんは、学校にいるウサギやニワトリの世話をしてくれます。ちょっとお話ししたら、もっと詳しく話したいことがあるということで、子どもたちはペットが好きですから、サバイバルキャンプのときに、ペットはどうしたらいいかという相談のためにも、話をしに来てくれました。子どもたちは、「ウサギの先生」とか「ニワトリの先生」ということで話しかけています。鳥インフルエンザの問題があったときも、すぐに駆けつけてくれて対応を考えてくれました。

元学校の先生だった方も来てくれました。来てすぐ授業をしてくださるので、私たちとしてはとてもありがたかったです。本当に先輩としてうれしかったです。

スライド6 まちには、趣味人が大変多いということも、私はこの学区に来てわかりました。3年生の昔のものを調べる単元で、火おこしを体験する授業です。子どもたちが火をおこして、物を食べたいというので道具を持ってきましたが、教師にはこれに火をつける技術がなかったものですから「どうしよう」と言っていたら、川原君のおじいさんがこのことに詳しいということで呼んでできました。60歳を過ぎた方ですが、ずっとボランティアで自然キャンプのリーダーをやっていたので、火おこし、ロープの結び方、刃物の使い方、歩き方にすごく詳しく



スライド1 お父さん先生と金魚釣



スライド2 校長先生とコマづくり



スライド3 三宿太鼓を練習



スライド4 地域のボランティアクラブと



スライド5 地域の専門家も協力



スライド6 火おこし体験

く、子どもたちと話をしながら教えてくれました。

4年間一緒にやっている、打ち合わせが要らなくなりまして、「今年も川原先生お願いします」と言うと、「はいはい」という感じで来てくださる方になりました。

出会いを生む人たちの出会い

スライド7 「ふるさと三宿 100人プラン」では、クラスのお父さん、お母さんを窓口にして、おやじの会のお父さんのようなネットワークを利用させてもらっています。学校の職員にも手話を習っている方、また、趣味を持っている方がいるので、先生たちにも協力していただいたり、地域の方にも学校協議会を通じて紹介していただきながら、ボランティア団体、NPOの団体にも声をかけていただきます。

このような、ネットワークを持っていると「大場先生、この方を知っていますか」と言っ、て、専門家、大学の先生を紹介してくれます。電話番号を聞いて、こちらからお願いすると、いろいろな専門家の方に会えることができました。

地域の趣味人ということでは、子どもが詳しくて、「うちのおじいちゃんはどういうことを知っているんだ」とか、「こういうことをよくやっているんだ」と。私にとっては素晴らしい出会いを生んでくれる人たちとの出会いでした。

私の中でいちばん思い出に残っている

ふるさと三宿100人プラン

- 1 クラスのお父さん お母さん
- 2 おやじの会のお父さん
- 3 学校の職員
- 4 地域の方
- 5 地域のボランティア団体
- 6 地域の専門家
- 7 地域の趣味人

スライド7

みんななかよし

一人ではできないが
みんなとならできる

フリーマーケットをして
たぬき祭りに参加しよう

話し合い・役割分担・本物
協創・協働・協生

スライド8

るのは、腹話術をやりに来てくれたおばあちゃまでした。その方と打ち合わせのために何度か会っていると、「私は、実は命の電話相談をやっていたんです。長い間、自殺しようとする子どもたちとお母さんたちを助ける電話相談をやっていました。大場先生は、まだ若いからいろいろ経験ができていいわね」ということで、そのおばあちゃまと私は、それ以来本当に仲良しになりました。

パン屋のおじさんの所に相談に行った時、部屋の中に武者兜がありました。「何ですか、これは」と聞いたら、「いやー、僕の趣味は、こういう兜をかぶって映画に出ることなんだ」とおっしゃるのです。パン屋さんが趣味を持っているんだと思ったりしました。そしたら、「この兜を全部貸してあげるから、先生が6年生の担任になったらうちに借りに来なさい」という話をしてくれました。

私の家は町田なのですが、三宿、太子堂付近には知り合いが大変多くて、とても幸せに暮らしております。声をかけてもえらるとやはりうれしいです。

1人ではできない、みんなとならできる

スライド8 そんな中で「たぬき祭り」に出会っていきます。正直言って、私たちはいつもお願いして、調整して、ゲストティーチャーを呼ぶばかりだったので、これはちょっと悔しいと思って出かけていこうと思いました。それで、「たぬき祭り」にフリーマーケットを出してみようというのが私の中でいちばん初めの思いでした。

子どものフリーマーケットを「たぬき祭り」という所でやらせてくれることがわかりました。私はその方針として、1人ではできない、しかし、みんなとならできるという体験をさせよう。みんなでやるからこそ、みんなの合意が必要になる、勝手にはできない。みんなで作るからこそ、もっとより良くなる。自分の得意なこと力を発揮して役に立ちたい。話し合い主義で、役割分担をして、本物に出会わせたいという考え方の下に、フリーマーケットをつくっていくことになりました。

スライド9 運び出しは、保護者と共同で行います。家から学校へいっぱい子どもたちは売れるものを運んできます。売れる物だったら何でもいいのです。

さて問題です、この「たぬき祭り」で売られているスヌーピーのぬいぐるみに、子どもたちはいくらと値段を付けたでしょうか。

実は、たった20円です。20円では儲かるわけがないです。でも、どういう値段にするか。これを売っていいかどうか、という議論を、3年生は3年生なりに必死にします。これを持ってきた後に、係の子どもが見回して「傷なし、汚れなし、かわいさよし、よし、これはぬいぐるみグループだ」というふうにするわけですね。

その次に、東にすることも思いつきます。これは、タオル5本ですが50円です。これが子どもの論理で、こっちのタオルのほうがぬいぐるみよりためになると思ったので50円を付けたのだと思います。

これ新品です。新品というのは、子どもにとって価値があると確定していて、新品をいっぱい集めることに意欲を燃やします。うちの中にある新品として、銀行で買ったものなどを集めてきます。これは、使っていないジグソーパズルなのですが、これにいくらと付けたでしょうか。

10~20円、20~30円、30~50円、100円、だんだん子どもの気持ちがわかるようになってきましたね。100~200円、200~300円。正解は20円です。今日売っている子に、「20円でいいの」と聞いたら、「これは長い間うちの押入れに眠っていたものです。これはかなり古いので、開けたら中がわからない。黄色くなっているかもしれない。だから20円に相当する」という話を彼はしていました。

あらゆる「どうするんだ」をあらいだす

私たちがフリーマーケットをやるときに、最初物はどこから集めるか、値段はどうするか、誰がこれ売するのか、残ってしまったらどうするのか、町に変な人がいて僕たちが襲われたらどうするんだ、雨が降ったらどうするんだ、売れ残った

らどうするんだということで、「どうするんだ」ということを書き出して、ずっと貼っていったら、ポストイットが100枚とか200枚になりました。子どもは気が小さいものですから、本当に些細な悩みまで、「売っているときに、お腹が痛くなったらどうするんだ」というのまで出てきました。

それを全部分類して、プロジェクトチームをつくっていきます。どういうプロジェクトチームかという、何を売のかを決めていく商品部、売れる物はどうやって集めるのかを決めていく販売部、値段をどう付けていくかの銀行部、売れなかったらどうするかという苦情部というふうに全部プロジェクトチームにしていきます。その後、プロジェクトチームがクラスみんなに合意を図るために提案していきます。

うちのプロジェクトチームは、こういう品々については20円にいたします。こういう品々については50円にいたします、ということ提案します。それで、クラスみんなで討議して合意されるとOKで、文句が出たら永遠に話し合いが続きます。本当にしつこい授業でした。

子どもの思いというのはそういうものだと思って授業をつくっていきました。最後にいちばん悩んだ問題は、儲かるお金が大体4,000~5,000円になります。これをどう使うかです。1番に何と言ったでしょうか、子どもの心理がわかるでしょうか。どなたか。

貯金したい。

大場 貯金したい、そんなことは言いません。貯金は出てきませんでした。

募金したい。

大場 募金したい、というのは優秀な女の子が言います。募金したい、社会的に貢献したいと。いちばんヤンチャな子は、山分けしてくれです。4,000円を28人で割ってくれということです。

子どもたちは、「先生、私はこれと、これと、これを出しました。鈴木君はカード1枚しか出しません。それなのに山分けするなんてことはありえっこない」と言うのです。理に合わないということですが、鈴木君は、「いや、俺は声を張り上

げて売りました。みんなよりたくさん働きました。だから、みんなと同じように平等にするのは当然である」というような話し合いにもなりました。

募金の案も通しました。トトロの森記念館に募金させていただいて、余ったお金をセブン・イレブンの募金に入れました。なぜセブン・イレブンになったかという、セブン・イレブンでは、チャリンと入れられるというのです。振り込みはやめてくれ、チャリンという募金をやると、募金した感覚があるんだというのです。

それから、クッキーを作りたいという女の子がいましたので、それはお礼の会をするときにクッキー代となりました。たった3,000~4,000円のお金を巡って延々と秋まで続いて、とても楽しい実践が続きました。

スライド10 子どもの話し合いだけでは本活動は実現できません。保護者の方に協力していただいたり、地域の方に買っていただいたり、交通安全のために保護者の方や学校の職員に協力していただいたりします。最後は担任が必死で叩いて売ることもあります。「10個で10円」とか言って、オモチャを持っていてももらったりもするのです。すると、次の年、そのものがまたフリーマーケットに出てきたりします。すごく楽しいです。「そのオモチャ、どこかで見たね」、「去年出した」とかいう感じで。結局グルグル回っていったりするような笑い話もありました。

スライド11 この年は、ちゃんとテーブルの上で売りました。この子はスターで、縫いぐるみを売るプロです。うまいんです。抱き心地がいいとか、持った感じがかわいいとかCMして、自分が売りたい物を、やはり子どもたちは役割を決めて売っていきます。声を出すのも上手になりまして、ある男の子は、家で商売をしていて、「いい練習になった」と、お母さんに誉められたと言っていました。

「共楽」一緒にやることは楽しい

スライド12 これは去年の様子です。梅津さんのお話で、共生とか協働と



スライド9 保護者と共同で運び出し



スライド10 保護者、地域の方、学校職員の協力で実現



スライド11 声をあげて売り物をCM



スライド12 「共楽」があるから続く



スライド13 買い物学習のお礼の会



スライド14 地域の公園で授業

か、いろいろあるキーワードの中に、私は「共楽」を入れたいと思いました。一緒にやるのが楽しいのです。やはり楽しいという感覚がないものは、続かないだろうなと思います。

スライド 13 買物学習のお礼の会をする子どもたちです。ここにマフラーが見えますが、これは子どもたちの手づくりです。毛糸を友だちと買いに行き、茶沢通りの毛糸屋さんで一卷き 100 円の毛糸と 100 円じゃない毛糸があって、予算からいって 100 円のほうにしてきたと言うのです。こんなようにいろいろな物語ができました。

まちを考えられる人になるために

スライド 14 前の学校、町田におりましたときに 私は 1,2 年生と一緒に、地域の公園で 1 年間ずっと授業をしてまいりました。春は桜を、秋はドングリを拾って、夏にはザリガニ釣りをして、つたのツルを使って縄飛びをしたりもしました。私は町田でこの実践を熱心につくってきたのですが、何か心細かったのは、いま思うと、人とかかわっていなかったからだろうなと思います。

最後にこの広い公園の中に、色々なガラクタから子どもたちが集めてきてすみ家をつくったら、公園課の人に、「大場先生、あれは浮浪者のすみ家ですか」と言われたこともあります。この公園の中に

宝物を埋めて、20 歳になったら、それを掘り出そうねということで残してきました。この学校を離れました。私の子どもたちとの夢です。

大人になってまちを考えられる子どもは、まちに思い出と友だちがいる。また、体を動かし学習ができる。話合いが楽しく、好きな子どもたちだろうと思います。

ご静聴ありがとうございます。

小澤 ありがとうございます。わかりやすく、とても楽しい授業風景を、私たちもイメージできたと思います。まさしく、学校地と生活地を結び付ける学びを、地域の先生たちも学んでいるのかと思います。

<講演 2>

シティズンシップ(市民性)とまちづくり



小玉重夫

お茶の水女子大学大学院助教授

プロフィール

東京大学法学部卒。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。

慶應義塾大学教職課程センター助教授を経て、現在お茶の水女子大学大学院人間文化研究科助教授。

博士(教育学)

アメリカのラディカル・デモクラシーに着目し、教育の公共性、多文化主義と教育の観点から精力的に教育批評を行なっている。著書に『シティズンシップの教育思想』(2003 年、白澤社)、『教育改革と公共性 ポウルズ=ギンタスからハンナ・アレントへ』(1999 年、東京大学出版会) などがある。

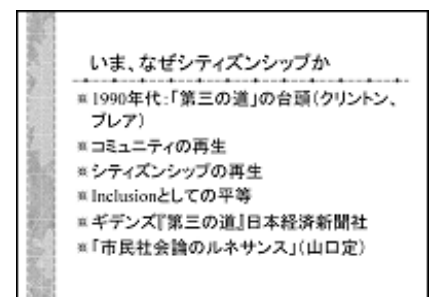
こんにちは。うちも小学生が 2 人いるのですが、週 5 日制になって、2 日間学校がありません。日本の場合は、法律で小学生の保護というのが規制されていないこともあって、地域で子どもを預かってくれる場所や広場のようなものが整っていない場合には、どうしても親が家で子どもの面倒を見なければいけないということがあって、今日もその関係で、12 時からのお祭りの見学ができなかったのです。梅津さんと大場先生のお話を聞かせていただいていると、地域の中で子どもを育てていく環境というものはどうやってつくっていくのかということが、やはりいま日本の社会の中で、東京だけでなく、普遍的に問われているのではないかと思います。

いま、なぜシティズンシップか
(スライド 1)
「シティズンシップ」という言葉が、今日の話の中心的な概念になっています。梅津さんから、片仮名言葉はわかりにくいというお話があったのですが、なかなか

か日本語に訳しにくくて、標題では、「市民性」としました。

冒頭に、小澤先生から、1998 年にイギリスで「シティズンシップ教育」が必修になったというお話がありまして、そのこととも非常に大きく絡んでくると思っております。いま私たちが、シティズンシップという言葉をとことん使う、世界的というか、時代的な背景に、やはり 90 年代の大きな動きがあったと思います。

それは、「第三の道」というふうには括られている、グローバルな、思想的な潮流が台頭してきた時代で、90 年代に、アメリカのクリントンやイギリスのブレアが政権を取って、それで政策的にシティズンシップを基軸にした政策を打ち出して



スライド 1 (当日のパワーポイントより)

いく。それがやはり非常に大きな影響を与えていると思います。その中で、小澤先生から話のあったような、98年の「シティズンシップ教育の必修化」ということも出てくるかと思うのです。

それでは「第三の道」で、どういうことが言われたかということ、やはり「コミュニティの再生」です。地域社会の再生ということが、非常に大きな課題として主張され、そして政策化されたということです。その関係で、シティズンシップを再生しなければいけないということが言われました。そして、片仮名言葉ばかりで恐縮ですが、「Inclusion」という、包含とか包摂という日本語に訳されますが、すべての人が社会に参加できるような、そういう仕組みをつくっていく。そういう意味での平等な社会をつくっていくということです。

平等という概念は、もともとは経済的にすべての人々に最低限度の生活を保障ということで、経済的な平等ということで「平等」ということが言われてきた流れがありますが、Inclusion ということで、経済的な平等ももちろんです、それだけではなくて、すべての人が社会に参加できるような、そういう意味での平等という、平等という言葉の意味合いを、組み換えていこうという動きが出てきます。

そうした議論は、アンソニー・ギデンズという人が言っている話です。イギリスのブレア政権における政策ブレンで、『第三の道』(日本経済新聞社)という本が翻訳でも出ています。彼がこういう概念を提起して、そして1つの政策的な潮流をつくって、これが特にイギリス、アメリカの90年代の教育政策や社会政策を主導していったという流れがあると思います。

それが、日本の中にも入ってきて、「市民社会論のルネサンス」という、山口定先生という政治学者が言われていますが、「市民社会のルネサンス」ということが、日本でも90年代に言われるようになりました(山口定『市民社会論』有斐閣)。山口先生が言っているのは、95年に阪神・淡路大震災があって、それがボラン

ティア元年と言われるような状況をつくって、その動きが98年3月の、いわゆるNPO法、特定非営利活動促進法の成立につながっていくという形で、NPOのムーブメントが、非常に大きな潮流として起こって、それが市民立法という形で、法律になったということです。山口さんによると、98年の「特定非営利活動促進法」で、初めて「市民」という言葉が、法律用語として取り入れられたのだそうです。そういうようなことから山口さんは、市民社会論のルネサンスというのが、90年代の日本にも入ってきたという言い方をされているわけです。

教育改革とシティズンシップ

(スライド2)

こういう形で90年代にシティズンシップに関する関心が、日本でも欧米でも高まってきて、それが実際の教育改革の流れに影響を与えていきます。バーナード・クリックという、この人もギデンズと並ぶブレア政権のブレンで、イギリスを代表する政治学者ですが、このバーナード・クリックが中心となって、「学校におけるシティズンシップと民主主義の教育」という、通称「クリックレポート」といわれているものがあるのですが、これが98年に出されます。冒頭の小澤先生の話にあった、98年の「シティズンシップ教育の必修化」という話に直接結び付いていきます。

アメリカでも、クリントン政権下でハリ・ポイトたちが中心になって、「新しいシティズンシップ」論のグループが形成されて、その流れで、ミネソタ大学のハンフリー公共政策研究所が「民主主義とシティズンシップのセンター」をつくって、シティズンシップ教育の実践をしたりしています。それから、同じハンフリー公共政策研究所に「学校改革センター」ができて、ここがチャータースクールという新しいタイプの公立学校をつくるアイデアを出して、これがいま全米に波及していて、「チャータースクール法」を各州がつくって、いま全米で3,000校くらいあります。

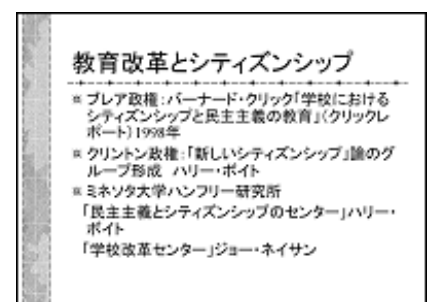
こういう流れの中で、日本でも90年

代に学習指導要領の改定が行われて、それが現行の学習指導要領になって、そこで小澤先生からも話が出た「総合的な学習の時間」が新しく導入されたわけです。「総合的な学習の時間」をどう意味づけるのかということについては、議論の分かれるところかと思うのですが、私などが感じるのは、ある意味では、日本版シティズンシップ教育の可能性を学習指導要領が準備したという側面をもっているのではないかと思います。

というのは、日本の公立学校というのは、学習指導要領上の縛りがあって、教える内容というのは基本的に決まっていますので、1958年から40年間ずっとそれ以外のことを自由に教えることはできなかったわけです。「総合的な学習の時間」は、カリキュラム上の規制が基本的には撤廃されている領域です、基本的には何をやってもいいというふうになっています。そこを基盤にして新しい教育ができる。

もう1つは、クロスカリキュラムということで、「総合的な学習の時間」の特徴として横断的ということが言われています。すべての教科を横断した内容を、ここでは取り扱うことができる。小学校だけではなくて、中学校や高校のような教科の専門性がどんどん高まっていく段階でも、「総合的な学習の時間」についてはすべての教科の先生が、それを担当しなければいけないということになっていきます。教科横断的に広い内容のことを、しかも必修ですから、先ほどのクリックレポートと一緒に、すべての小中高生は、この「総合的な学習の時間」を必ず学ばないと卒業できない。

そういう意味で、このシティズンシップ教育の日本版という意味合いも含んで、日本でも成立したという側面があったと



スライド2

思います。ただ、日本の場合には、少なくとも政策レベルではシティズンシップ教育という形では概念化されなかったので、「総合的な学習の時間」がこのシティズンシップの教育のためのものだというふうには、あまり認識されていないというか、私たちに共有されていないという現実も一方にはあって、そこが難しいところかなと思っています。いずれにしても、このような形で、90年代にイギリス、アメリカ、そして日本でシティズンシップの流れが教育改革の動きの中に入って来たという状況がありました。

ソーシャル・キャピタルとシティズンシップ (スライド3)

また片仮名言葉で恐縮ですが、「ソーシャル・キャピタル」がシティズンシップの問題を考える際の1つのポイントになるのではないかと考えております。シティズンシップということが一体何を意味するのか、市民性と言っても、実態が何なのか、なぜそれが「まちづくり」や「コミュニティの再生」と結び付くのかということを考える上で、ソーシャル・キャピタルという概念を間に入れて考えると、少し見えやすくなるのかなと思います。

ソーシャル・キャピタルを日本語に置き換えるとどういうふうになるのかというと、アンソニー・ギデンズなどは、「社会的信頼のネットワークだ」と置き換えております。私流にもう少しわかりやすくいうと、最近NHKの番組の題名になっている「ご近所の底力」という、そういう言葉が、おそらくこのソーシャル・キャピタルという概念を定義づけるのに結構ふさわしいのではないかと考えています。

詳しくは配布資料の「ボランティアとシティズンシップ」(『ボランティア学会

2003 年度学会誌』2004) という私の論文に書かせていただいたので、後でお読みいただければと思うのですが、ソーシャル・キャピタルという概念は、もともとはジェームズ・コールマンという社会学者が定義した概念です。アメリカの1960年代の教育改革は、ちょうどジョン・F・ケネディが大統領だった時代で、私たちは「福祉国家的な平等化」というふうに言っていますが、連邦政府、国家が主導して、社会から貧困をなくしていくということ、財政的な支援を、例えば貧困地域の公立学校などに投入し、政府主導の平等化政策が行われたわけです。

アメリカの場合には白人と黒人が分住して、コミュニティが分かれていますので、そのままその地域の小学校に地域の子どもたちが行くという形にすると、黒人の地域の小学校は黒人の小学校になるし、白人の地域の小学校は白人の小学校になるので、60年代当時の民主党政権が行った1つの手法として、「バッシング」と言って、強制バス通学で、黒人地域の学校の子どもと白人地域の学校の子どもをバスで相互乗り入れて通わせる。そうすれば両方の学校が白人と黒人の共学になるので、それで平等な教育ができるだろうという方法です。

ソーシャル・キャピタルが教育力向上の鍵

ところが政府主導の平等化政策では、本当の意味での、例えば黒人地域の小学校の子どもたちの学力が、なかなか上がらない、そういう問題が解決できなかったということで、ジェームズ・コールマンが、「コールマンレポート」の中で、政府主導の福祉国家的な平等化政策がうまくいかなかったというレポートを出して、これが非常に有名になったのです。ジェームズ・コールマンが、政府主導ではない形で、どうやって教育の平等性を確保していくのかというときに、彼が着目したのが、ソーシャル・キャピタルという、ご近所の底力というか、社会的信頼のネットワークを指す概念です。

つまり、このソーシャル・キャピタル

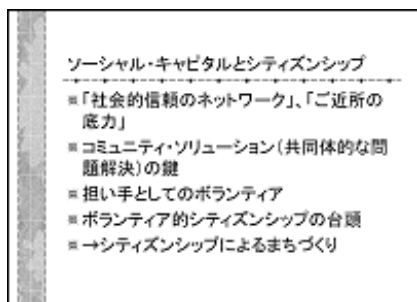
が、それぞれのコミュニティや地域社会の中にあるかどうかということが、その学校の教育力、あるいは教育の効果を上げるための鍵になるのだということです。ですからコールマンは、そういうソーシャル・キャピタルが充実しているような地域社会を、それぞれの学校の周りにつくっていくということが、教育改革の課題だという理論化をしていくわけなんです。それがギデンズをはじめ、いろいろな理論家に影響を与えていくことになるわけです。

このコールマンたちが言っているソーシャル・キャピタルという理論は、日本の学者も注目していて、たとえば慶應義塾大学の教授で2002年まで慶應義塾幼稚舎の校長先生をされていた、金子郁容さんが、このコールマンたちの提起したソーシャル・キャピタル論を導入して、コミュニティ・ソリューションという、共同体的な問題解決を、日本の中でももっとつくっていかねばいけないという論を展開しています。

そのために、1つ鍵になるのは、金子さんによれば、ボランティアの役割である。ボランティア団体、ボランティアを中心にした市民運動や市民団体が、地域に積極的にかかわるようなシステムをつくることだと。

もう1つは、それによってソーシャル・キャピタルを地域社会の中につくっていくということが重要だと言っています。その具体的な方策として、彼は、コミュニティ・スクールという、新しい公立学校の制度を提案したわけです。金子郁容さんの話について、配布資料の論文の方で多少詳しく紹介させていただきました。金子さんの本としては、『コミュニティ・ソリューション - ボランティアな問題解決に向けて』(2002,岩波書店)のほか、もう1冊、金子さんをはじめ、3人の方が書かれた本で、『コミュニティ・スクール構想』(2000,岩波書店)が出ています。

そういうことで、日本でも金子さんたちが中心になって、コミュニティ・ソリューションの担い手としてのボランティアの役割に対する注目がなされて、そし



スライド3

てボランティアが中心になって、市民性を担っていくという「ボランティア的シティズンシップ」が台頭していく。それが、この「シティズンシップによるまちづくり」という話につながっていくということで、今日の梅津さんや大場先生のお話とも非常に密接に絡んでくるような話が、理論的、あるいは政策的な部分を含めて、いまの日本の教育改革、教育政策の中心的なテーマとして浮上してきているということがわかるのではないかと思います。

ソーシャル・キャピタル論の問題点 (スライド4)

金子さんやコールマンたちが言っているソーシャル・キャピタル論に対しては、実はいろいろな批判も出されています。1つは共同体主義に陥る危険です。地域社会の対立や抗争を隠蔽する、あるいは異質な他者と関わり合う政治的スキルをもたささないというような批判があります。例えばアメリカでソーシャル・キャピタルを批判している論者として、ミネソタ大学のハリー・ポイトという人がいます。この人はシティズンシップ論の論者ではあるのですが、ソーシャル・キャピタル論を批判しています。

このソーシャル・キャピタル論に基づくボランティア的シティズンシップという考え方は、アメリカではクリントン政権のときに出た考え方ですが、民主党と共和党という対立を越えて、両派がこれに注目していて、ブッシュ政権になってもそれが引き継がれています。

ところが、そこに実は問題があったのではないかということ、ポイトは言っていて、「ブッシュ大統領はボランティアとしての市民という彼の理念を、今日のアメリカの大学で支配的なシティズンシ

ップ論を唱えている共同体主義理論から得ている。この国で共同体主義を主導している理論家は、ハーバード大学教授でアメリカ政治学会会長でもあるロバート・パットナムである。パットナムは、アメリカ合衆国内の生活において、ボランティアな組織が衰退傾向にあることを明らかにしてきた。問題は、そうした衰退傾向をいかにして扱うのかという、その方法にある。パットナムは、彼が『ソーシャル・キャピタル』と呼ぶもの、すなわちボランティアの精神の再活性化を提唱する。彼は民主党員でありながら、ブッシュ大統領の就任演説の起草を手伝い、他の共同体主義者たちとともに『シティズンシップ推進派の大統領』がホワイトハウス入りしたことを祝った。そればかりか、9.11同時多発テロ以後、合衆国内で社会的連帯が強まる兆しがあることを、新しいシティズンシップのあかしであるとすら主張している」と、ポイトは述べていて、ソーシャル・キャピタルに基づくシティズンシップ論が危険なものだ、と言っているわけです(前掲配付資料参照)。

地域社会の対立・抗争を隠蔽してしまう危険

ポイトが、ボランティア的シティズンシップ論の何が問題だと言っているかという「ボランティアとしてのシティズンシップ」というのは、権力、政治、そして合衆国と世界に存在する広範な多様性を欠落させている。ブッシュのボランティアリズムに代表されるような『ソーシャル・キャピタル』の理念は、人間の結びつき、慈愛、ケアの積極的なイメージを喚起させ、非人間化され、分断され、物質主義的になった社会において、人々の共鳴を誘う。しかしながら、そうした慈愛やケアは、不正と闘う大胆さや勇気、問題に取り組む才能、イデオロギーや価値が鋭く対立するかもしれない異質な他者と関わり合う政治的スキルをもたらしはしない(前掲配付資料参照)。

ソーシャル・キャピタル論やそれに基づくボランティア的シティズンシップ論というのは、コミュニティや共同体が

持っている積極的な意味に注目するのですが、その裏側として、地域社会の中にある対立や抗争を隠蔽して、異質な他者と関わり合う政治的スキルをもたささないのではないか、というのが、ここでのポイトによる批判のポイントです。

日本の論者も似たような批判をしています。例えば教育改革国民会議や中央教育審議会といった、どちらかといういまの日本の政策サイドが考えている「新しい公共」とか、「奉仕活動」といった議論の中に、こういう共同体主義的な側面があるのではないかということで、例えば、中野敏男さんは、戦前の国家総動員体制みたいなものも、実はボランティア的な共同体というものを基盤にしていたので、そういうものにつながりかねない、そういう戦前の国家総動員体制的なものが、奉仕活動の義務化論や、あるいは「新しい公共」というものの中に入り込んでしまう危険があるのではないか、という趣旨の批判をしています(中野敏男「ボランティア動員型市民社会論の陥穽」『現代思想』vol.27-5,1999.5.,青土社)。

ソーシャル・キャピタルをコミュニティ・ガバナンスに (スライド5)

確かにこういうソーシャル・キャピタル論には問題点があることは、私自身も思うのですが、実際にボランティア活動をしたり、あるいは地域のコミュニティづくりにかかわっている人たちの行動や意識の中には、いま言ったような共同体主義に陥る危険性というものがあるのかもしれません、しかし同時に、そういうものに解消されない多様性とか、異質なものの複合体という要素もあるのではないかということで、そういうものを生かした形でまちづくりというか、コミュニティというものを考えることができ

ソーシャル・キャピタル論の問題点

- ※ 共同体主義に陥る危険(地域社会の「対立」や「抗争」を隠蔽、異質な他者と関わり合う政治的スキルをもたささない)
- ※ 教育改革国民会議、中教審等での「新しい公共」、「奉仕活動」をめぐる議論

スライド4

ソーシャル・キャピタルを
コミュニティ・ガバナンスに

- ※ 「異なる価値観、異なる意見」の存在を前提にしたまちづくりという視点(梅津氏) = イデオロギーや価値が鋭く対立するかもしれない異質な他者と関わり合う政治的スキル(ポイト)
- ※ 行政の役割の転換→「官僚主義的現状維持」でも「補充性原理」でもなく、「市民活動を促す触媒」に

スライド5

ないのかということで、このソーシャル・キャピタルという言葉をもう少し発展させた言葉として、コミュニティ・ガバナンス、直訳すると「共同体の統治」として発展させていくことができないかということ、いま考えています。

これも、アメリカの理論家で、ポウルズとギンタスという人が、ソーシャル・キャピタル論を批判する中で言っていることで、ソーシャル・キャピタルという英語自体が、「キャピタル」、訳すと「資本」という言葉になります。資本は、基本的にはお金に還元されるものというか、所有できるものという意味合いですから、「キャピタル」という概念自体は経済学的な概念なわけです。

ところが、ソーシャル・キャピタルを構成する要素は、「ご近所の底力」、あるいは「社会的信頼のネットワーク」ということですから、必ずしもそういう「もの」に還元されない、人々の関係性にかかわることです。ですから、ソーシャル・キャピタルという言葉で、それを概念化すること自体が問題なのではないかということで、いま経済学者の中でも論争になっていて、このポウルズやギンタスも経済学者なのですが、彼らはこのソーシャル・キャピタルという概念を使うのは望ましくないということで、「コミュニティ・ガバナンス」という言葉に置き換えて考えたほうがいいのかと提案しています。

そこで、梅津さんの話をちょっとお借りしたいのですが、梅津さんがおっしゃっている「異なる価値観や異なる意見の存在を前提にしたまちづくり」という視点が、ポイトが言っている、「イデオロギーや価値が鋭く対立するかもしれない異質な他者と関わり合う政治的スキル」ということに実はつながっていくのではないかと。そういうものを取り込んだまちづくりというのが、このコミュニティ・ガバナンスという視点に具体的な意味合いをもたせることになるのではないかと。これを、いま考えています。

行政がもっと市民活動を促す触媒に
もう一つは、梅津さんの論文の中で、

「行政の役割の転換」という話をされていて、いま新しい公共とか、NPOの役割をもっとちゃんと行政の中に位置づけていかなければいけないということは、どこの自治体も声を大にして言い始めていることなのですが、それに対して、梅津さんも論文の中で批判されていて、いろいろな論者も批判していますが、下手をすると、行政が今までやってきた福祉的な活動とか、そういうものの財政的な部分を緊縮化して、行政が責任逃れをしていくための口実に使われる可能性や、あるいは学童保育とか保育所とか福祉とか、そういうものを民間に委託していくことを、正当化するための弁法になっていく可能性があるのではないかと。つまり、NPOや市民の活動というものが、補完性原理という形で、行政の補完的な機能をもつものとしてだけ位置づけられてしまう危険性が言われていると思います。

ただ、それではいままでの、福祉的なものや教育などを行政がすべて担うという、福祉国家的なところにもう一度戻ればいいのかということ、必ずしもそうではないのではということ、官僚主義的な現状維持でも、それから「官から民へ」というふうに通俗的に言われているような補完性原理の考え方でもなく、そのどちらでもない、それこそ第三の道といえますか、行政がもっと市民活動を促す触媒になっていくということが重要です。これも実はアメリカの90年代のクリントン政権の1期目の最後に、民主党の政策綱領の中に「新進歩主義宣言」というのが出てきて、その中に謳われている文言です。行政の役割が官僚主義的な現状維持でも、政府あるいは行政の補完性原理という考え方でもなくて、第三のオプションとして、政府はこれから市民活動を促す触媒という役割を果たしていかなければいけないのではないかと。そういう視点が、おそらくこれから重要になってくる。そういう視点で、行政の役割というものがもっと変わっていくということが重要になってくるのではないかと。これを、いま考えています。

そういうふうに考えれば、ソーシャ

ル・キャピタルという考え方、あるいはそれに基づく共同体主義とか、あるいはボランティア的なシティズンシップ論には、先ほど指摘したような問題点はあるのですが、だからといってそれを全面的に批判するのではなくて、ソーシャル・キャピタルをコミュニティ・ガバナンスの視点で組み換えていくことができるのではないかと。これを、いま考えています。

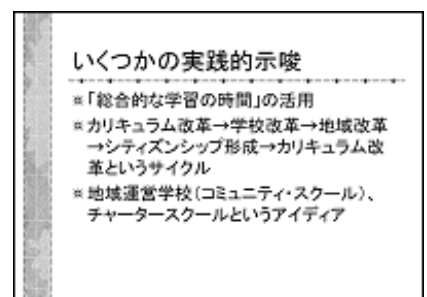
「総合的な学習の時間」でシティズンシップ教育 (スライド6)

では一体具体的にどういうことをすればいいのかということになるのですが、先ほどの梅津さんや大場先生の報告の中で、多くの部分は語られているので、私のほうで付け加えることはないのですが、やはりいま学校教育でいえば「総合的な学習の時間」の活用ということが重要になってくると思います。

将来的には、これがシティズンシップ教育の必修化のようなところにつながってほしいと個人的には思うのですが、まだ現状ではそうなっていない段階で、「総合的な学習の時間」を当面活用することができる。

理由はいくつかあって、学習指導要領上の規制がないということがありますが、同時に、いままでの教育課程は、「総合的な学習の時間」が登場する前は、教科と教科外という枠組みだったわけです。つまり教科の授業があって教科外の活動がある。

シティズンシップの養成につながるようなものというのは、もともとそれぞれの領域にあったわけです。例えば、社会科学とか家庭科は、まさにシティズンシップの問題を扱う教科ですし、教科外の特活動と呼ばれている領域の中でも、生



スライド6

徒会，児童会とか学校行事というものがあって 私たちはそういうものを通じて，要するに，選挙で人を選ぶというのはこういうことなんだとか，選挙運動というのはこうするものなんだとか，根回しはこうするものなんだとか，いろいろな民主主義的なスキルや手法というのは，一応小学校，中学校の時代に児童会とか生徒会とかをやりながら模擬的に学んでいくという側面がもともとあったと思うのです。

往々にして，そういう教科と特別活動は切り離されて，あまり有機的に結び付けられてはこなかったと思うのですが，「総合的な学習の時間」をうまく使えば，両者をもう一度結び付けていくことができるのではないかと思いますし，先ほどの大場先生の話の中でも，例えば，うちの上的子どもはいま小学校3年生で「まち探検」をやっているのです。社会科の学習指導要領の中で，小学校3年生では「まち探検」というのをやることになっているようなのですが，そういう，社会科のいわゆる「まち探検」という，既存の学習指導要領の中に位置づけられているカリキュラムと，「総合的な学習の時間」の中でコミュニティに参加していくとか，その中でいろいろな民主主義の問題を学んでいくことと，それが行事とかホームルーム，学級活動の中で，みんなでいろいろな意見をぶつけ合いながら物事を決めていくというようなことが，つながっていくという意味で，教科と行事を含む特別活動とが，「総合的な学習」を媒介にして結び付けていく，そういう実践が，おそらく三宿小学校の中ではなされているのかなと思いつつ聞かせていただいたのですが，そういうことが，1つの実践的な可能性としてあると思っています。

シティズンシップ形成の循環構造

カリキュラムを改革することが，1つの学校の中で，例えば「総合的な学習の時間」だったらその時間をベースにしながら，カリキュラムを変えていくということが，学校全体の改革につながり，それが地域の改革にリンクし，そして子

も自身のシティズンシップの形成と，地域社会を構成する大人の側のシティズンシップの形成につながっていったら，それが地域社会に住んでいる人たちの学校への参加という形で，学校のカリキュラムの改革につながっていく。それがまた地域の改革にという，こういう循環構造というか，サイクルのような構造になっているのかなということです。

ですから，ニワトリと卵みたいなもので，どっちが先でどっちが後という問題ではなくて，地域と学校という，両方が相互に促し合いながら，こういうサイクルをつくっていくということがあり得ると思うし，実際に太子堂の地域で行われている実践というのが，かなりそれに近い動きになっていると思いつつ聞かせていただきました。

それから，現実的な問題でいうと，金子郁容さんが提唱した「コミュニティ・スクール構想」が，2004年6月の通常国会を通して，2005年度から，「地域運営学校」の創設という形で成立します。私は，この地域運営学校に，具体的にどの学校が指定されて，どういう形で地域運営学校をつくることになるのかということが，まだよくわかりませんが，共同体主義の問題点ということいえば，どっちにも転ぶというような側面もあるものかなと思うのです。ただ，一応実践的な可能性としていえば，既存の公立学校の改革をしていくための1つの道具が提案されたと見ることは，不可能ではないだろうと思います。例えば三宿小学校がコミュニティ・スクールになるということは，すでに現実的に行われていることをそのまま追認すればいいだけという気がしないでもないのです，そういう意味では，是非積極的に考える価値があると思つたりもします。

あるいは，チャータースクールということで，もう少し自由にできるような学校で，日本的にいうと，研究開発学校的なものとか，あるいはNPOがいまいろいろところで，構造改革特区の中で学校づくりをしていますが，そういう研究開発学校的なもの，あるいはNPO的なもの，そういうものが新しい公立学校

の中で，新しいシティズンシップの教育をつくっていく可能性があるだろうと思っています。

具体的にどうすればいいのか

それでは具体的に何をしていけばいいのかということについては，私もむしろ皆さんから教えてほしいところが非常に多いです，特に，官僚主義的でも補完性原理でもない，行政が市民活動を促す触媒になるというのは，具体的にどうすればいいのかということとは，実は私もいまいろいろ困っているところです。「市民派」の市長とか区長とかが出てきて，いろいろなことをやるのですが，往々にして，既存の福祉の削減につながっていくことが多いのです。例えば保育所を民営化することで，いま通っている公立の保育所が潰れるとか，そういう形になっていくことが多くて，なかなかこの補完性原理でも，いままでの現状維持でもない，第3の道としての，市民活動を促す触媒としての行政というイメージが，十分に形成されてはいない面があって，この点については是非皆様方からいろいろアイデアをお聞かせいただきたいと思います。

そういうことも含めて，シティズンシップという視点で，まちづくりを考えていくことには，非常に実践的な意味があると思っています。

最後に，文献紹介ですが，『シティズンシップの教育思想』（白澤社，2003）は，小澤先生のほうからご紹介いただいた，私の本で，今日の話のかなりの部分も，この本の内容と重なります。また，先ほどの梅津さんの論文「まちの達人と出会う！」『青少年』No.347,2001.11.）を，文献として挙げさせていただきます。

また何かありましたら，討論の中で出していいただければと思います。ありがとうございました。

文献

- ※小玉重夫『シティズンシップの教育思想』白澤社，2003
- ※小玉重夫「ボランティアとシティズンシップ」『日本ボランティア学会2003年度学会誌』，2004掲載予定（近刊）
- ※梅津政之輔「まちの達人と出会う！」『青少年』No. 347, 2001. 11.